会報 191 号添付資料②

2018 年 7 月 30 日

鎌倉市
　市長　松尾崇　様
鎌倉市教育委員会
　教育長　安良岡靖史　様

図書館とともだち・鎌倉
代表　和田安弘

鎌倉市図書館近代史資料室への職員配置と司書の新規採用について（要望）

日頃より、鎌倉市図書館の充実・向上にご尽力いただき感謝申し上げます。

さて、去る 7 月 14 日、中央図書館において、鎌倉市における近現代史資料の収集・活用はいかにあるべきかというテーマで、5 名の市議、中央図書館長および館長補佐を含む 30 名の参加者によって熱意ある意見交換が行われました。

このときの議論で共有されたのは、鎌倉市における「近現代史の不在」、すなわち鎌倉市には他の自治体ならどこにでもある文書館、郷土館の類がなく、とりわけ現在の鎌倉をかたちづくっている近代以降の歴史を対象とする資料館が不在で、市民（子どもたちも含む）がわが町の成り立ちを知り、自分が育った土地への愛着や誇りを持てるような学びの場がないことへの危機意識でした。

歴史文化交流館での近代以降の展示は極めて不十分であり、地域資料を収集・提供する図書館においても現状では書籍など刊行物を中心にしたものに収集範囲が限られています。将来的には近現代史資料館の建設が望まれるところですが、それまでの間は現状を放置していいということにはなりません。

そこで議論の中でクローズアップされたのは中央図書館にある近代史資料室の存在です。同室は 1977（昭和 52）年に開設され、40 年以上にわたって多種多様で貴重な資料の収集が進められてきました。しかしながらそこに集積された資料の活用に関しては展示会の開催、論文発表、一部の人へのレファレンスなどに限定され、一般市民が同室に立ち入り、資料を利用できるようなかたちにはなってはいませんし、そもそも図書館の資料として登録されてもいません。

「近現代史の不在」を解決するための当面の策として、この近代史資料室の整備・充実は実現可能にして有効な方法と思われます。まずは同室の資料データを作成し、どんな資料が所蔵されているかだれの目にもわかるようにすることが喫緊の課題です。そのためには兼務ではなく専任の正規職員の配置が必要と考えます。発足以来、嘱託職員によって運営されてきましたが、近代史資料室を整備することで鎌倉ならではの特色ある図書館として発信するためにも正規職員の配置を要望します。

あわせて、20 年以上、有資格者の新規採用がなされてこなかったことに鑑み、近代史資料室への職員配置によってできた人員不足を補うために、そして図書館職員の世代交代を支障なく進めるためにも有資格者の新規採用をお願いする次第です。